

# 『徒然草』のコミュニケーション力

● 土 屋 博 映

## 一、はじめに

『徒然草』と言えば、日本人の誰もが知っている古典の中の古典である。しかし、その実態はあまり知られていないようである。『徒然草』が知られているのは、まずは中学、高校の授業で取り上げられること。そして恐らく教える側でも本書を賞賛するので、いつのまにか、『徒然草』はすごい、という思い込みができてしまうのである。気がついたら、『徒然草』ファンになっていた。味オンチなのに、行列のできるラーメン屋のラーメンをおいしいと思うようなものである。また、大学入試等で出題されるのもその要素として大きいものがある。では実際は大した作品ではないかという、そうではない。予想として、大した作品の仲間には入るであろう、とは言える。それはどうしてかという、14世紀に成立して以来、今日に至るまで、古典文学として語り続けられているからである。文学作品が残り続けるためには、多くのファンはいらないとされる。つまり当座の人気があっても、それは今だけのものかもしれないからだ。流行というのは実にあてにならないもので、世の中、はやり廃れの多いこと、何事もそうである。本当のファンは、その対象に心底ほれている人で、しかもその作品の価値を自分なりにしっかり把握しているという人、つまり、流行に右往左往するのではなく、対象となる文学作品のよさを信念をもって知っている人のことである。また、作品の内容から言えば、いわゆる随筆文学に属することがあげられる。「随筆」とは英訳すれば「エッセイ」となる。日本語で理解すれば「思いのままに記した作品」ということになる。したがって大体において、一文章は長くない。短いということはある意味でいいことなのである。気楽に読めるからである。ちょっと読んで、なるほど、面白い、と読みきることができるのだ。これが、同じく古典中の古典の『源氏物語』だと、ちょっと面白い、というわけにはいかない。登場人物の個性、関係等知悉し把握してはならない。また長いから、ちょうどよく区切るというわけにもいかない。だが、『源氏物語』がよみこなせるような読者なら、本物のファンになってくれるに違いない、というよい面もある。『徒然草』などはある意味で、行列のできるラーメン屋みたいなもので、本物のファンは出来にくいとも言えよう。

では、どうして、本書を後世に残すような、本物のファンができたのかということ、やはり『徒然草』には、他の作品よりも只者ではないところがあったのである。ということは作者の兼好法師が只者ではなかったということにもなる。本稿では「兼好法師」という人物を、伝記と時代背景をあわせ考え、推定し確認することと、『徒然草』自体の概要と評価を、確定し、最終的に、時代を超えて、現代まで、日本人の心を捕らえて来た『徒然草』（兼好法師）のコミュニケーション力を見出したいと考えている。

## 二、「兼好法師」の人となり

『徒然草』（日本古典文学全集・解説）には次のように記されている。

「兼好の俗名は卜部兼好であり、彼の家系は代々神祇官あるいは太政官として奉仕してきたの

であるが、兼好の祖父兼名の時から庶流となり、父の兼頭は治部少輔、兄の慈遍は大僧正になったが、同兼雄は民部大輔、兼好自身は藏人・左兵衛佐として仕官する程度の身分であった。①兼好は幼時から聡明で記憶力もすぐれ、感性の鋭敏な人として成長した。しかも、対者の心理を鋭く洞察し、その思考法がすぐれて論理的であったことも、生得的なものであったことが、まず想定されるのである。

兼好は青年期に達して、時の第一級の藤原貴族、久我家の系統に属する堀河家に家司として仕え、おそらく堀河家の媒介によって藏人・左兵衛佐となり、宮廷を中心とする貴族社会圏に常時出入りするようになる。若き日の兼好は、このような生活のなかで、②貴族文化を全面的に身につけたであろう。古代貴族文化に対する執念のような思慕の情も、青年期の体験の決定的な刻印であったに相違ない。

兼好の出家は、貴族世界での仕官生活のなかで、しだいに内発的に醸成されたものと認めざるをえない。鴨長明のように、外発的な事件によって一挙に結構されたような出家は、兼好のよしとしなかったところである。そうして、このことは作品『徒然草』の本質にかかわる重要なポイントでもあったはずである。

出家後の兼好は現世にも修道生活にも安住できなかった。③心を澄まして仏の世界へ上昇しようとするほど、彼には現世への関心が高まってきたに相違ない。上昇と下降とのせめぎあいこそが、兼好の根底をささえており、その緊張が持続したかぎり、『徒然草』は文学としてのリアリティーを獲得しつづけることができたはずである。（傍線部筆者）

『徒然草』の著者、兼好法師について、傍線部①～③でほとんど言い表していると思われる。①は、兼好の本来の性格、②は、宮仕え時の身につけた情、③は、出家後の葛藤、である。

### 三、『徒然草』とは

『徒然草』（日本古典文学全集・解説）には次のように記されている。

「いったい①『徒然草』の中には、おなじ随筆作品の一部を構成しながら、形式・文体の著しく異なる部分が共存している。たとえば『徒然草』には、②説示的あるいは内省的に著者の主張を直接展開する部分があり、これらは形式的には現在法によって叙述されているが、章段の数からいえば圧倒的に多く、ほとんど全段の半ば近くを占め、作品の第一要素であることを示唆している。また、その残りの部分を合算すれば、全章段の過半数を占める叙事形態の諸段ということになるがそのうちで、およそ半ばを占める諸段は、③説話型の、形式的には主として伝聞回想の助動詞「けり」によって語られている部分である。

つまり、『徒然草』は、その叙事的な形態の諸段においても、説示的・内省的な形式をとる部分とまったく同様に、いずれもそれぞれ異なる形式を通じつつ、より多面的より全円的に兼好の志向を表現している。また、それらすべては彼の思想に収斂されつつ、しかも一見脈絡の希薄な諸段の寄せ集めであるかのような集合体形式として実現されているのである。しかし『徒然草』は、その独自の形式において、④展開形式の物語や起承転結形式の『方丈記』のような随想とも異なる、構想の自由を獲得しているのであって、これこそ典型的な随筆形態の表現の独自性である。」（傍線部筆者）

『徒然草』は、②の、説示的・内省的な部分と、③の、説話型の部分をもっている。これが①に言う、随筆作品の一部を構成しながら、形式・文体の著しく異なる部分が共存している、とい

うことである。しかし、その二律背反のような内容が、④に言うように、構想の自由を獲得している、ということである。

### 三、『徒然草』のコミュニケーション力をさぐる

定説では、『徒然草』は『方丈記』のごとく、一気に書かれたものではなく、少なくとも、三段階に分けて書かれたと見ることができるという。そのうち、若き日に記したのが、第三十段までで、第三十一段から第二百三十段あたりまでは、出家後、教養人として活躍していたころに書かれたものと見られている。今で言えば、第三十一段から、本格的な文筆活動に入ったということであろう。その第三十一段から、試みに、第四十二段までをとりあげ、兼好のコミュニケーション力のあり方を検討してみることにする。

ちなみに直前の第三十段は、人間のはかなさを描いている。論理的・客観的ではなく、叙情的・感覚的に、人生を嘆いている。それを以下の段が受ける流れである。

#### ① 第三十一段

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがり言ふべき事ありて、文をやるとて、雪のことなにとも言はざりし返事に、「この雪いかが見ると一筆のたまはせぬほどのひがひがしからん人の仰せらるる事、聞き入るべきかは。返す返す口をしき御心なり」と言ひたりしこそ、をかしかりしか。

今はなき人なれば、かばかりの事もわすれがたし。

本段は、いわゆる体験過去の「き」を用いているので、兼好の実際の体験だったということを示している。体験とは言え、具体的な状況は「雪のおもしろう降りたりし朝」としか記されていない。状況を曖昧にしたまま、事件を述べるところに、読者に想像力を喚起させる効果がある。たとえば「人」は男なのか、女なのか、ということがそれである。また、末尾の一文、その人は、実はもういない、とさりりとまとめる。感情を極端に制限し、読者の想像力、感情に訴える効果がある。

#### ② 第三十二段

九月廿日の比、ある人に誘はれ奉りて、明くるまで月見歩く事侍りしに、思し出づる所ありて、案内させて入り給ひぬ。荒れたる庭のしげきに、わざとならぬ匂ひ、しめやかにうちかをりて、忍びたるけはひ、いとものあはれなり。

よきほどにて出で給ひぬれど、なほ事ざまの優におぼえて、物のかくれより「しばし見ゐるに、妻戸をいまま少しおしあけて、月見る気色なり。やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。あとまで見る人ありとは、いかでか知らん。かやうの事は、ただ朝夕の心づかひによるべし。その人、ほどなくうせにけりと聞き侍りし。

本段も、前段同様、体験過去が用いられている。兼好の体験なのだが、「九月廿日」という日付のみ具体的で、それ以外に具体的状況は記されていない。やはり、最後の一文が「その人、ほどなくうせにけりと聞き侍りし。」と、さりりと亡くなっていることを記す。感情を極端に押し殺したまとめである。

### ③ 第三十三段

今の内裏作り出されて、有職の人々に見せられけるに、いづくも難なしとて、すでに遷幸の日ちかくなりけるに、玄輝門院御覧じて、「閑院殿の櫛形の穴は、まろく、ふちもなくてぞありし」と仰せられける、いみじかりけり。是は葉の入りて、木にてふちをしたりければ、あやまりにてなほされにけり。

本段は、「有職の人々」の誤りを玄輝門院が、訂正した話だが、末尾の部分が「あやまりにてなほされにけり。」と結果を淡々と述べるのみである。「いみじかりけり」とはあるのだが、それを末尾に置かない点、兼好のつとめて感情を抑制しようとする姿勢（性格）があらわれている。

### ④ 第三十四段

甲香は、ほら貝のやうなるが、ちひさくて、口のほどの細長にして出でたる貝のふたなり。武蔵国金沢といふ浦に有しを、所の者は「へなだりと申し侍る」とぞいひし。

本段は、京の常識であった「甲香」が武蔵国では「へなだり」と言う、兼好の経験の事実のみを述べる。これなどは「だからどうなのだ」と思わず問いかけたくなる内容である。あくまでも現代風に考えるならば、評価を読者にまかせてしまうという、ある意味で「傍観者」の姿勢と言っていいだろう。

### ⑤ 第三十五段

手のわるき人の、はばかり文書きちらすはよし。みぐるしとて、人に書かするはうるさし。

本段は、本書中、もっとも短い段（文章）の一つである。悪筆を隠すことを、「よし」「うるさし」の対照で断定している。どうしてなのか、理由は述べない。

### ⑥ 第三十六段

「久しくおとづれぬ比、いかばかりうらむらんと、我が怠り思ひ知られて、言葉なき心地するに、女のかたより、仕丁やある、ひとり、など言ひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよき」と、人の申し侍りし、さもあるべき事なり。

本段は、「人」が「女」に無沙汰していたが、女のほうから、さり気なく無沙汰の気まずさをとりはらう行為に出たことを聞き、兼好が納得した内容。彼の評価は「さもあるべき事なり」のみである。

### ⑦ 第三十七段

朝夕隔てなく馴れたる人の、ともある時、我に心おき、ひきつくろへるさまに見ゆるこそ、「今更かくやは」など言ふ人もありぬべけれど、なほげにげにしく、よき人かなとぞおぼゆる。うとき人の、うちとけたる事など言ひたる、又よしと思ひつきぬべし。

本段は、親しい人が、時に遠慮し、控えめな態度をとるのを、「よき人」と判断し、疎遠な

人が、逆に親しく話すのを「よし」と考える、ただそれだけである。対人関係（コミュニケーション）は微妙である。「親しき仲にも礼儀あり」であり、また場面によれば疎遠な人も親しく話してもよいという、「臨機応変」の姿勢。しかも、それらをああだこうだと言わない。「こう思うのだ」と言っておしまい、である。

### ⑧ 第三十八段

名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚なれ。

財多ければ身を守るにまどし。害をかひ、累を招く媒なり。身の後には金をして北斗をささふとも、人のためにぞわづらはるべき。愚かなる人の目をよろこばしむる楽しみ、またあぢきなし。大きな事、肥えたる馬、金玉の飾りも、心あらん人は、うたて愚かなりとぞ見るべき。金は山にすて、玉は淵に投ぐべし。利にまどふは、すぐれて愚かなる人なり。

埋もれぬ名を長き世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ、位高く、やん事なきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。愚かにつたなき人も、家に生れ時にあへば、高き位に登り、奢りを極むるもあり。いみじかりし賢人・聖人、みづから賤しき位にをり、時にあはずしてやみぬる、また多し。偏に高き官・位を望むも、次に愚かなり。

智恵と心とこそ、世にすぐれたる誉も残さまほしきを、つらつら思へば、誉を愛するは、人の聞をよくこぶなり。誉むる人、そしる人、共に世に止まらず、伝へ聞かん人、またまたすみやかに去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られん事を願はん。誉はまた毀の本なり。身の後の名、残りてさらに益なし。これを願ふも、次に愚かなり。

ただし、しひて智をもとめ、賢を願ふ人のために言はば、智恵出でては偽あり。才能は煩惱の増長せるなり。伝へて聞き、学びて知るは、誠の智にあらず。いかなるをか智といふべき。可・不可は一条なり。いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく、功もなく、名もなし。誰か知り、誰をか伝へん。これ、徳を隠し、愚を守るにはあらず。本より賢愚・得失の境にをらざればなり。

迷ひの心をもちて名利の要を求むるに、かくのごとし。万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず。

本段は、長文である。本段については、既に本学「紀要」で論じているので、詳細についてはふれないが、彼のコミュニケーション力について、簡単に触れようと思う。本段は、彼の、初期の本書執筆時の心境から、脱皮したまさにそれを示す段だと考えている。第三十段で人の世のはかなさを感情的に嘆いた彼は、第三十一段・第三十二段の、「人は死んで名を残す」といった内容を描くことにより、嘆きから立ちあがるきざしをみせ、本段に至って、最終的に過去の自分に決別するのである。それが漢文訓読調となり、畳み掛けるような強さで、自己の考えを一気に述べることになる。ある意味で兼好の心の奥底が垣間見られる段と言えるかもしれない。それはさておき、彼の人に訴える強さ（コミュニケーション力）は、まずは冒頭の一文に現れる。「名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚なれ。」と簡潔明快に、人生のあり方をテーマとして掲げるのだ。この存在だけで、彼の主張は一気に読者に伝わるといふ効果がある。

詳細は省くが、末尾の二文、「万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず。」がまた簡潔明瞭である。冒頭と末尾を読んだだけで彼の主張は読者に容易に理解できる。彼のコミュニケーション能力のすぐれたところである。

### ⑨ 第三十九段

或る人、法然上人に、「念仏の時、睡にをかされて行を怠り侍る事、いかがしてこの障りを止め侍らん」と申しければ、「目の醒めたらんほど、念仏し給へ」と答へられたりける、いと尊かりけり。また、「往生は、一定と思へば一定、不定と思へば不定なり」と言はれけり。これも尊し。

また、「疑ひながらも念仏すれば、往生す」とも言はれけり。これもまた尊し。

本段は、過激な前段とはうってかわり、自己主張が少ないものとなっている。読むに優しい文は、おだやかで心地よいが、それも連続しすぎると、マンネリ化して飽きがかかる。時に過激な自己主張の強さが出る前段から、一転して、「法然上人」の尊さを述べる段となる。上人の言葉は、いわゆる僧侶としての発言とは思えない、ゆるやかな発言である。その三つの言葉を、三回「尊し」という言葉で評価する。簡潔明快である。あれこれと理屈っぽい評価はしないのである。

### ⑩ 第四十段

因幡国に、何の入道とかやいふ者の娘、かたちよしと聞きて、人あまたいひわたりけれども、この娘、ただ栗をのみ食ひて、更に米のたぐひを食はざりければ、「かかる異様のもの、人に見ゆべきにあらず」とて、親、ゆるさざりけり。

本段は、評論家小林秀雄が、本書からとりあげ、兼好の目の確かさを大いにたたえた段として有名である。因幡の国の美しい娘は、「栗食い女」なので、沢山の求婚者がいたのに、親が「こんな変わった娘は結婚させるわけにはいかない」といった、伝え聞いたことをそのまま書いているだけのようである。兼好の兼好たる所以は、末尾の「親、ゆるさざりけり。」にある。「親」を評価しているのである。当時の結婚観がいまひとつつかめないのが、当時の読者は、この末尾を読み、なるほど、と感じたに違いない。

### ⑪ 第四十一段

五月五日、賀茂の競べ馬を見侍りしに、車の前に雑人立ち隔てて見えざりしかば、おのおの下りて、埒のきはに寄りたれど、ことに人多く立ちこみて、分け入りぬべきやうもなし。かかる所に、向ひなる棟の木に、法師の、登りて木の股についで物見る、あり。とりつきながら、いたう睡りて、落ちぬべき時に目を醒ます事、度々なり。これを見る人、あざけりあさみて、「世のしれ物かな。かく危き枝の上にて、安き心ありて睡るらんよ」と言ふに、我が心にふと思ひしままに、「我等が生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて物見て日を暮らす、愚かなる事はなほまさりたるものを」と言ひたれば、前なる人ども、「誠にさにこそ候ひけれ。尤も愚かに候」と言ひて、みな後を見かへりて、「ここへ入らせ給へ」とて、所を去りて、呼び入れ侍りにき。

かほどの理、誰かは思ひよらざらんけれども、折からの、思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて、物に感ずる事なきにあらず。

本段は、数少ない兼好の自慢話の一つである。『方丈記』と異なり、彼はほとんど自分と言うものについて語らない。言わば「傍観者」としての姿勢をくずさないわけであるが、時にほ

ころぶこともある。そういう意味では重要な段である。「賀茂の競べ馬」の場で、「競べ馬」も見ずに木の上で落ちそうになりながら眠りこけている「法師」を皆が笑ったのに対し、兼好が「我等が生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて物見て日を暮らす、愚かなる事はなほまさりたるものを。それを忘れて物見て日を暮らす、愚かなる事はなほまさりたるものを」と発言し、皆が感動した、という内容である。ここでの主張は「我等が生死の到来、ただ今にもやあらん。」にあるのだろうが、最後の段落は少々照れ気味に記しているようにも感じ取れる。こころへんは生身の彼が表現されていると思う。自分を、「傍観者」の鎧で固めようとしている姿勢に油断が生じたと言えるかもしれない。

## ⑫ 第四十二段

唐橋中将といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧ありけり。気の上る病ありて、年のやうやうたくるほどに、鼻の中ふたがりて、息も出がたかりければ、さまざまにつくろひけれど、わづらはしくなりて、目・眉・額なども腫れまどひて、うちおほひければ、物も見えず、二の舞の面のやうに見えけるが、ただ恐ろしく、鬼の顔になりて、目は頂の方につき、額のほど鼻に成りなどして、後は坊の内の人にも見えずこもりゐて、年久しくありて、なほわづらはしくなりて死ににけり。

かかる病もある事にこそありけれ。

本段は、恐ろしい病気にかかった「行雅僧都」について、伝聞した話を記したもの。読んで思わず目をそむけたくなる内容を、末尾の一文では「かかる病もある事にこそありけれ。」とさりりとまとめる。ここに兼好の「傍観者」としての真髓があるのではないか。他の誰が、このような気味悪い内容をとりあげようか。しかもそれについての評価の淡々としたことはどうだろう。ある意味で本段は、彼の姿勢を知るものとして非常に重要な段と言ってよいと思う。

## 四、おわりに

『徒然草』の作者兼好法師（卜部兼好）は、神官の家系という、教養・知識を吸収しやすい環境に生まれた。また宮仕えも経験し、高貴な方々の世界もよく知っていた。教養人であり、知識人であり、客観的・論理的な性格をもっていた。はなはだ文化的であるから、おだやかな性格であったと思われる。彼が出家した原因は明確ではないが、鴨長明のように激情にかられて、一気に出家に至ったというのではなく、日常生活の中から、次第に出家に傾いていったというのが通説である。これは、当時の時代背景をより追及しないと、確定的なことはいえないが、当時一般の僧侶のあり方とも関わるであろう。出家しながらも、仏道にのめりこむという姿勢ではなく、彼はある意味で常に出家にも「傍観者」であり続ける。この「傍観者」というのが彼の人生観の根本にあるように思われる。それは、ある対象に、一途に向かい続けられないということである。したがって『枕草子』の作者とも異なり、もちろん『源氏物語』の作者とも異なる。

しかし、「傍観者」であり、のめりこまないと言うことは、読者に安心感を与える一面も持つ。作者の主張が押し付けられないので、受け取る側では、悪く言うと、都合のいいように解釈できる、のだが、よく言えば、あらゆる読者に安心感と共感をひきおこし、読者の人生のプラスになるということがいえる。『徒然草』のコミュニケーション力の本質は、まさにそこにあるのである。